

民部大輔友重と高政は同一人物か

宮下良明

(会員 佐伯市古江区)

前史談一七五号で野々下晃氏の論説「高政と友重は別人説について質す」により、兵橋重政に関する一連の論旨は、概略お分り戴いたものと推察します。

ただし、問題の提起者野々下氏力説の友重高政同一人説と、森秀郷氏のいう別人説とは、平行線を辿るのではないかと私は思う。

いずれにせよ、両説共に十分な確証があつてのこと、またそうでなければならぬ。

そこで後述の持論は、両説の史料を参考にしながら、進めてみたいと思う。

民部大輔とは「律令制八省」の中の一つの省、民部省の次官位をいい(広辞苑)、かなり高い官位を指す。では森(毛利)民部大輔なる人物は、何時頃文書・文献等に現われたか、初見は明らかではないが、私の知る限りでは、「大閣史料集」の一〇七頁、天正一十六年(二五八八)

四月十日付けで、次の記述が初めになる。

それは豊臣秀吉が、京都内野に新築した聚楽第(じゅらくてい)に後陽成天皇が行幸された時、御盛儀の次第を書いた行幸記の行列中に、高官武将と共に森民部大輔が名をつらねており、この時の民部大輔は友重である。

御承知のように、秀吉の九州平定は天正十五年(一五八七)であつた。当時の記録黒田家譜並びに大閣史料集には、毛利兵橋、森勘八の名が見える。つまり高政の名森勘八を、この頃まで名乗っていたことが分かる。

しかし、天正十六年以後文禄・慶長年間まで、森(毛利)民部大輔が誰であるかを確定する資料は見当らない。個人的に判断する以外にないと思うが、一般に毛利民部大輔といえば「友重」を指すものと認めて良いと思う。

そこで文書・文献等で見た友重の経歴を、年代を追つて私見を交えながら記述することにする。

(一)天正二十年(一五九二)、豊臣秀吉が進めた朝鮮出兵の際、毛利民部大輔(友重)の名が中国毛利家文書の、秀吉朱印状(八七六号)に見える。それには毛利兵橋、宮木長次、早川主馬等の舟奉行と共に、輸送船確保の任にあつたとされている。

(二) 慶長二年(一五九七)第二次出兵には、各武将間の目付の一人に、毛利民部大輔(友重)の名がある。(島津史料集、黒田家譜、中川文書)

(三) 前史談一七五号で野々下氏の論説中に、戸倉文書の一部が公開された、これは貴重な郷土史料として研究の対象にされるものと思う。それには、文禄五年(一五九六)五月十九日付け、民部大輔友重より森織部への宛行状

・慶長三年(一五九八)八月十五日付け、民部大輔友重より森織部への宛行状で、いずれも民部大輔は友重名を用い高政ではない。

(四) 日田市岳林寺の友重文書

岳林寺は県下有数の古刹で名高い。南北朝の時代、足利尊氏が九州入りをした際、岳林寺に宛てた文書が現存することで寺歴が分かる。

慶長四年(一五九九)十月十九日付けで友重が、岳林寺に与えた宛行状がある。内容はともかく、文面は祐筆が書いたとしても、花押(サイン)は一般に本人の署名が通説と聞く。そこで岳林寺文書と、戸倉文書に記す友重の花押を比べてみると、少々異なっているが

それは後日の研究に待つとして、これまで見てきた民部大輔友重は、慶長四年十月十九日の時点で、日田地方に在任していたことは岳林寺文書により明らかになったものと思う。

(五) 今一通の森織部に与えた戸倉文書によれば、慶長六年(一六〇二)十二月十日付けで、佐伯荘大坂本村、城村、黒沢村の三ヶ村において千石を宛行っている。

真偽の程は分からないが、わずかの期間、毛利民部大輔高政を名乗った唯一の書状と推察される。

更に翌七年伊勢守の名跡を継ぎ、毛利伊勢守高政と名乗って、寛永五年(一六二八)江戸で没する迄同名で終わった。

以上の諸点から推測すると、問題視される空白時代は慶長五年九月の関ヶ原合戦に、両説の謎とされる点を絞り込んで良さそうである。そこで疑問点をあげながら、同一人説、別人説について解説して見たい。

同一人説

この説に沿って論ずると次のようになる。

まず天正十五年(一五八七)二十八才の頃まで、森勘八を名乗って豊臣一族の家臣として行動した。次の年十六年四月民部大輔に任官、毛利民部大輔となえ友重と

文書から見た民部大輔略年表

年	号	官職氏名	文献名	所収文庫
天正十五年(一五八七)		森勘八	豊臣秀吉九州平定	黒田家譜
天正十六年(一五八八)		森民部大輔(友重)	聚楽第行幸記	大閤資料集
文祿元年(一五九二)		毛利民部大輔(友重)	韓国出兵船奉行	中国毛利家文書
文祿年中時期不詳		民部大輔高政	温故知新録	戸倉文書処所収
慶長元年(一五九六)		民部大輔友重	森織部宛行状	戸倉文書
慶長二年(一五九七)		民部大輔友重	森織部宛行状	戸倉文書
慶長三年(一五九八)		民部大輔友重	森織部宛行状	戸倉文書
慶長四年(一五九九)		民部大輔友重	日田岳林寺宛行状	岳林寺文書
慶長五年(一六〇〇)		民部大輔(友重)	玖珠角牟札城	黒田家譜
慶長六年(一六〇一)		毛利民部大輔高政	森織部宛行状	戸倉文書

改名した。

以後慶長四年（一五九九）十月十九日、日田岳林寺文書発行の頃まで約十一年間、同名で経過したことになるか。

慶長五年九月、関ヶ原合戦に上京したことは確かと思われるが、当時の名は友重か高政かは不明、ここでは同一人説に従って友重としておく。

鶴藩略史に基づいて祖述した佐伯市史には、高政はこの時丹後国田辺城（細川氏）攻めに参戦したと記しているが、正しい記録とは思われず、取上げる段階ではないと私は思う。佐伯地域には高政に関係する流布本は多いが、後世の書物で資料的には無理であろう。ことに慶長五年九月から、六年四月に掛けて、前述の通り不明な点が多い。慶長六年は略年表に示す如く、毛利民部大輔高政の名で（戸倉文書）徳川家康より佐伯二万石を与えられ、更に翌七年には、前述の通り伊勢守高政と名乗り、寛永五年江戸で没した。

ただ感想として、後世の書物ではあえて両者を結び付けて力説し、創作する必要はなかったのではないかと考えている。以上が同一人説を想定した見解である。

別人説

森秀郷氏が強く主張している別人説に従って述べると、毛利民部大輔友重は、毛利兵橋重政の弟で履歴は不詳（森一族のすべて）とされている。

ところが、豊後国においては友重の足跡を知る文書・文献等、かなりの数が散見される。中でも慶長四年十月の時点で、日田地方に在任していた事實は、前述の岳林寺文書で判明した。従ってこれまでの友重は高政と同一人ではないことも分かった。

そこでこの別人説を辿って行くと、やはり同人説同様、慶長五年の関ヶ原合戦が時間的に問題となるので、森資料を引用しながら持論を述べると、民部大輔友重が参戦し、一方では毛利勘八高政も参戦したことになり微妙である。

一方、伝承されている毛利（森）氏一族の系譜の一つに、かりやすか苅安賀（愛知県一宮市）城主、森勘解由という武将が、関ヶ原合戦の時徳川家康の御家人として戦死し、その名跡を高政が継いだという記録（原本は岐阜県庁所蔵）があり、これも信憑性は高い。

いずれにしても、関ヶ原合戦は両説の鍵を握る分岐点となり、説明が必要と心得ている。

黒田家譜重視の上で記述したと思われるが、前述の通り家譜にいう民部大輔の城云々だけで、高政の築城を決め付ける訳にはいかない。

附(三) 駒井日記 (豊臣秀吉の祐筆駒井益庵の日記で、文禄日記ともいう。)これが築城に一つのヒントを与えてくれるのではないか。

それによると、文禄二年(一九九三)九月十三日、豊後より検地帳到来、都合四拾貳万石あり、近日中に毛利兵橋、宮木長次など遣す、当面は宮部法印が残所の代官である。物成は宮部法印が納める。とこのような意味と受けとれる。

検地帳到来が文禄二年九月であるから、少なくとも天正の終わりには、秀吉の計画した朝鮮出兵に対する兵糧の調達は、進んでいたものと理解してよい、そのための検地であったと解釈している。

こうした厳しい監視下に置かれた豊後国で、築城を許されたとする武将達を推測すると、宮部法印(検地奉行)毛利兵橋重政(日出城主)宮木長次(日田代官)毛利民部大輔友重(二万石の大名か)位であつたらうか。もつとも命令を下すのは秀吉であつた。

(一) 民部大輔友重即、高政と認めてよいか。

(二) 友重・高政の出身が今少しはつきりしない。

(三) 勘八・友重・高政が同一人とすれば、いつ友重に改名したのかまた、友重が高政に改名した動機と年代。

(四) 岳林寺文書の友重と戸倉文書の友重は果たして同一人か。

(五) 日田、玖珠を支配したと伝えるが、当地に言い伝え等の記録があるのか。

(六) 高政は日田・玖珠の大名か、または代官か。

(七) 寛政重修諸家譜、高政系譜の信用度は。

(八) 鶴藩略史では天正五年に明石郡松ノ郷で三千石食すとある、高政十八才の知行として信じて良いのか。

(九) 高政は、秀吉の陪臣ばいしんという説がある、事実関係はどうか。

(十) 家康と高政の関係。

(十一) 友重の豊後入国はいつか。

以上問題点を掲げて、同一人説別人説の要点を述べた。しかし、決定的な史料は私の目に止まらなかった。ただ最初から高政の名で論究すれば問題が残る。

附(一) 温故知新録 今一つの別人説は、知新録(一)

四四〇頁に幕府の御尋書に対する当藩の答えとして、右の勘八郎は文禄年中に民部大輔高政と改めた。爵位を授けられた年月日は判明しないと答えている。この内容に付いて考察すると、文禄以後から慶長年中の友重名宛行状は、どのように解釈すれば良いのか、別人かまた後世の偽作か、判断に苦しむ。

また、温故知新録・諸旧記には、本文は民部大輔とだけ記すが、下段(大意)では既に毛利高政となつていることにも不審を抱く。

知新録は高政の時代以後、約二百年経過して集録された文書で、一部を除き直ちに史料として使えるものであろうか。ただし、これを信する信じないは識者の判断と考える。

(二) 角牟礼城 去る五月二十一日、会員七人と共に、日田市岳林寺の友重文書並びに、永興寺の古仏を見学し、翌日玖珠町森地区の角牟礼城に登った。

築城について大分大学豊田寛三教授は、玖珠町が編集した「よみがえる角牟礼城」の中で、毛利高政築城説を述べられている。



角牟礼城趾

時代を区分して、勘八・友重・高政を使い分ける以外
にないと考えている。

元社会教育課長加藤健一氏の論を借りれば、佐伯に流
布する高政関係の諸本だけでは解明は難しい。友重、高
政の出自、つまり生誕地から洗って行く必要があるのだ
はないか。

高政の故郷苅安賀には小字名、友重という地名もある。
また九郎左衛門高次、瀬尾小太郎等も地誌に載っている、
との御指導を得た。その線に沿って今後高政の生地を見
たい。

参考資料 駒井日記 日田市史 温故知新録 雀藩

略史 佐伯市史 森資料 岳林寺文書

野々下戸倉文書



復元された竈
水ノ子灯台吏員退息所

次号の原稿〆切りは

十二月末日です。

原稿をお待ちしています。